ヨコハマアートサイト

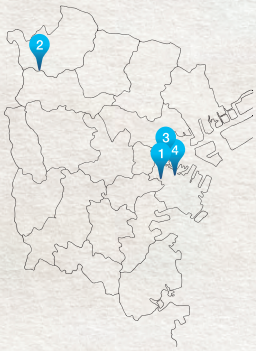
横浜の地域文化を考える・応援する

中区・Life worksプロジェクト（P.02）

2018 Vol. 018

「特集　道ばたの風景から」

緑区・都筑アートプロジェクト「米からアート　二つの米から考える」（P・03左）



特集 道ばたの風景から

いつもとちがう見慣れたまち

現実とフィクションがまちで交差する

まちに密着した5～15分ほどの短編映画を製作し、スクリーンのなかに観光地とは違った側面から見た横浜の魅力を描く「Life works」。2014年に監督・俳優の利重剛さんと、「ヨコハマメリー」などの映画監督で知られる中村高寛さんが始めた企画だ。できあがった作品は横浜のミニシアターで本編の前に“おまけ”として無料上映される。こうした試みは、実際に映画館に訪れた人だけが体験できる特別な時間になる。

「今日は久しぶりのLife worksです。よろしくお願いします！」秋晴れのもと、利重さんの声が響く。中区・松影町にある林会館の屋上で行われているのは、2015年に公開された『花の名前』の続編、『しあわせだったにゃよ』の撮影だ。モニターを見つめる利重さんの表情は生き生きと輝いている。「住宅地であるこのまちは、ここに暮らす人でなければなかなか訪れることのない場所」と利重さん。撮影はスタジオを使わず、実際のまちなかで行うのがポイントだ。撮影中も、すぐ隣の建物では住民が洗濯物を干していた。現在完成している映像は18本。いずれ市内全区の映像記録を残すのが目標だ。

この日は林会館・屋上のほか、ヨコハマホステルヴィレッジのフロント、市内に住む女性の部屋を借りた撮影が行われた。「実際にそこにある風景、そこに行ったら会える人が映っている。映画と現実のレイヤーが重なったりずれたりする瞬間が面白いです」と中村さんは語る。

作品は完成次第、市内のシネマ・ジャック＆ベティ、横浜シネマリンなどで上映される予定。

現実には存在しない人物を俳優が演じることで、普段の風景にドラマが生まれる。見慣れたまちに、新しい物語が立ち上がるようだ。

2
田園風景に溶け込む美術作品

東急田園都市線 田奈駅から5分ほど。恩田川沿いに、都筑アートプロジェクトが拠点にする「赤い家」がある。

都筑アートプロジェクトは2006年から都筑区・緑区など市北部でアートプロジェクトを展開。今年は稲作も多く行われているこのまちで、稲の“米”と米国の“米”を掛け合わせたテーマを設定し、10名の作家による滞在制作と展示「米からアート～二つの米から考える～」を開催した。

「田んぼのあるこの地域で創作していることを改めて意識した」と語るのは代表のとし田三津夫さん。展示期間中、稲刈を終えた田んぼには稲わらの束が天日干しされていた。クロージングパーティーでは新米が供されるという。

家の中央に置かれているのはメンバーの金井聰和さんの作品だ。木製のテーブルにはお皿と陶製の砲弾が隣り合って置かれている。「戦時中、弾薬庫として使われたこともある土地『こどもの国』と、このあたりで行われている農業からヒントを得た。食と武器、この一見対極に見えるものを並べて展示した」。

田園風景のなかに並ぶのは、まちの風土、そして歴史に着目したからこそ生まれた美術作品だ。

3
これまで知らなかった横浜の姿をお土産に

各地で行われる現代美術の国際展。近年注目されているのが地元サポーターによる活動だ。ヨコハマトリエンナーレ2017の会場では、公式サポーター・ハマトリーツ！の制作した路上観察の案内書が並び、来場者に向けて横浜の魅力を発信した。図や写真が並ぶ解説ページと地図ページからなる6点の案内書は、それぞれ『ブラフ』『横浜道』などのキーワードで会場周辺地域を紹介。地形やまちなみにも注目し、美術作品に残る風景との比較も特徴的だ。

手掛けたのは、自主活動グループ『時をかけるヨコハマ』。「皆さんが旅行にいくような感覚で、地元のまちを歩くのが好きなんです」と語るのは、チームリーダーを務めた深野一穂さんだ。

会期終了後も、有志がリサーチ活動を継続。対象は、武蔵国と相模国の国境に沿った古道・武相尾根、漁業や海苔の養殖が盛んだった本牧岬、江戸時代の富士山信仰によりつくられた都筑三富士塚など、いわゆる観光地に限らない。「裏道や横丁がおもしろいんですよね。道を中心にまちを捉えると見え方が変わってくる」。

夜空の星をつないで星座をつくるように、ポイントを巡り、道を辿ることで見えてくるものがある。

4
地域文化の視点で横浜を再発見する

「横浜での上映活動は難しいんですよ」。神谷秀明さんが代表を務める横浜キネマ倶楽部は、映画ファンによる上映団体。2005年の発足以来、市内のホールや公会堂で定期的な上映活動を行っているが、東京に行けば話題の新作も、隠れた名作も見ることができる。「上映機会に恵まれなかった素晴らしい作品に光を当てるには、インパクトが必要なんです」。学生時代から映画の上映に興味があった神谷さん。地元には市民映画祭があり、地域で撮影された作品がノミネートされていた。

今年度から横浜キネマ倶楽部は、横浜市内で撮影された映画作品をロケ地周辺で上映する試みをスタート。一作目は寿地区で撮影された『どっこい！人間節 寿・自由労働者の街』だ。関連企画としてフィールドワークやシンポジウムも行った。

新しい視点を持つことで、生活の場である見慣れた路地やいつもの街角がなんだか新鮮に見えてくる。

P.3左
都筑アートプロジェクト
http://tsuzukiart.p2.weblife.me/top.html
P.3中
横浜トリエンナーレサポーター ハマトリーツ！
http://yokotorisup.com/
P.3右
横浜キネマ倶楽部
https://ykc.jimdo.com/

ヨコハマ
アートサイト
ラウンジ
Vol.18

アーティストin商店街

【会場】マーケットテラスカフェ石川町（中区石川町）
【ゲスト】飯田峰子（石川町ストリートアートプロジェクト実行委員会／ひらがな商店街ウエストアベニュー会長）／
厚地美香子（認定NPO法人あっちこっち理事長）／内木里美（ダンサー／こどもディスコ主宰）
【主催】ヨコハマアートサイト事務局

5 まち×アーティストで生まれるもの

さまざまなコミュニティでアート活動の意義が見直されている今日。商店街をひとつの地域コミュニティと捉え、アーティストとまちの人でつくりあげるアートプロジェクトの裏側は一体どうなっているのでしょう。今回はマーケットテラスカフェ石川町を会場に、3名のそれぞれ異なる立場からのゲストを招きお話を伺いました。

ひらがな商店街ウエストアベニューの会長であり、石川町ストリートアートプロジェクトを運営する飯田峰子さんは、「まちのポテンシャルを上げることが、アーティストの価値を上げることにも繋がると思っていただけたら嬉しい」と語ります。

本牧で『こどもディスコ』を主催するダンサーの内木里美さんは「企画を固めきる前に地域の方に相談する。コミュニティ側とプロセスや気持ちを共有することを大切にしています」とアーティスト発信のイベントならではのコツを話します。

そして、認定NPO法人あっちこっちの厚地美香子さんは、アーティストとコミュニティを繋ぐ事業『アート・フォー・コミュニティ』での取組を紹介。「まずは双方で情報交換をするところから始めています。まちがアーティストに対し、きちんと要望を伝えることが重要です。アーティスト側にはまちのニーズを知り、要望に答えることで表現の幅も広がると知ってほしい」と語りました。会の後半では、客席からの質問を受け、実際にイベントを進めていくうえでの悩みや、解決に繋がるアイデアなども話されました。

次回のアートサイトラウンジは1月25日（金）に開催。詳細はHPをご覧ください。

地域文化の風景

6 伝統を守るため外に向かって「はじめの一歩」

川井康裕　館長
（久良岐能舞台）

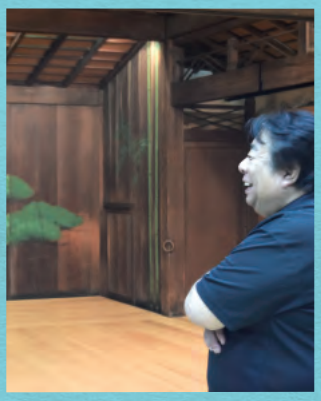
磯子区と港南区にまたがる久良岐公園の北側に位置するのが、久良岐能舞台。元々は、1917年に東京都日比谷に建てられ、能楽の稽古に利用されていたそうです。その後、能楽愛好家であった宮越賢治氏が譲り受け、この地に移築しました。収容人数も少なく、「見所（けんしょ）」と呼ばれる観客席は畳敷きなので、自然と一体感が生まれるところも魅力の一つです。また、最近は和室がない住宅が増えてきましたので、ここへ来て初めて畳に触れるという子どももいるようです。茶室もあり、伝統的な日本家屋の造りとなっているので余計に珍しいのでしょう。畳に鼻を寄せてイグサの香りを嗅いでいる姿を目にすることもあります。

久良岐というのは、かつて武蔵国にあった群の名前です。1927年の区制施行により一部が磯子区となり、1936年には残りの地域も横浜市に合併されました。そのため、磯子区は市内で最も古い区の一つです。さらに1970年前後には大規模団地の開発が進み、市内でも早くから市街化が始まりました。臨海部や円海山周辺など、それぞれの地域で事情は異なりますが、特に「丘のまち」と呼ばれるこのあたりは昔からの住民も多く、古き良き時代の雰囲気を残している一方で高齢化という地域課題も抱えています。

より一層まちを盛り上げるためにも、地域に「自慢できるポイント」がいくつもできればいいと思っています。そのためには、普段の取組から少し角度を変えて、新しい協働のかたちを生み出していくことの重要性と面白さを感じています。はじめの一歩を踏み出すきっかけをどうつくるか。身近なところから地域とつながっていくアイディアの一つとして、今年は庭園にある竹を七夕の笹飾り用に提供しました。スポーツセンターや市電保存館など、いろいろな施設で飾っていただき、地域の方々の願いがこめられた短冊でいっぱいになったようです。

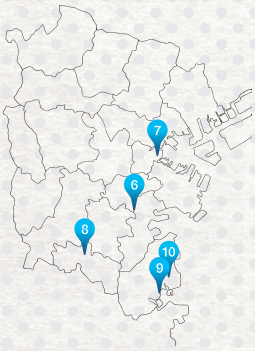
私自身は、元々ショーの演出やプロデュースなどエンターテイメント業界に携わっていました。能楽の魅力にはまったのは、ここへやって来てから。能楽師の格好良さを広く伝えるにはどうしたらいいかと考えた結果、パフォーミングアーティストやシンガー、ミュージシャンとコラボレーションした作品「サキの國」が出来上がりました。伝統芸能は鑑賞のハードルが高いと思われがちですが、この公演はあっという間にソールドアウト。伝統を守るためには、あえて新しいものを取り入れて外に開いていくことも重要なのだと改めて感じています。

庭園の竹



ロケーションに惹かれ撮影に訪れる人も

事務局うろうろ日記



ヨコハマアートサイト事務局は、今日も、横浜市内のあっちこっちへうろうろしています。

7 8月18日（土）

みなとみらい駅にて「WaWaWa！MM駅ナカ祭り」。浴衣姿の人がたくさんで夏らしい雰囲気いっぱい。認定NPO法人あっちこっちによるプログラム「生演奏でダンス！浴衣で参加大歓迎！」では参加者がオリジナル盆踊りに挑戦。MARK IS みなとみらい「ハマの職人展2018」でなにか体験しようとのぞいたら親子連れで大賑いだった。

8 8月26日（日）

栄区民文化センター リリスのイベント「リリスの大冒険」に行く。会場のあちこちでコンサートやワークショップが開催されており、各々リリスでの夏休みを満喫中。さかえegaoプロジェクトのクラフトワークショップブースは、草木で染めた紙を切ってオリジナルの模様が作れる。蘇芳（すおう）とウコンで染められた鮮やかな紙を選んでみた。

9 9月16日（日）

金沢区・海の公園の風物詩「金沢文庫芸術祭」に参加。今年は記念すべき20周年。エスニックファッションやアジアン雑貨を扱うブランド、チャイハネ40周年とコラボレーションし、スペシャル感を盛り上げている。年齢や性別、国、障害など一人ひとりの違いを活かし、取り入れることで大きくなったイベントなのだなと改めて感じた。

10 9月29日（土）

アーティストネットワーク+コンパスによる「会社まるごとギャラリー2018」のオープニングイベント。今年のテーマは「足し算＝コラボレーション」。金沢区の工場地域にアーティストが入り、廃材や各会社の魅力を引き出すような作品を制作したという。回を重ねるごとに参加企業も増え、パワーアップしているのがわかる。

ヨコハマ アートサイトとは

横浜市地域文化サポート事業。地域課題の解決にアプローチする文化芸術活動をサポートするため、文化芸術の持つ創造性をコミュニティやまちの活性化と結びつける文化芸術活動や、横浜の個性ある文化芸術を市内外へ発信する活動を広く公募し、支援する事業です。

事務局・お問い合わせ

ヨコハマアートサイト事務局
（STスポット横浜、横浜市文化観光局、横浜市芸術文化振興財団）
〒220-0004 横浜市西区北幸
1-11-15 横浜STビル 208
（認定NPO法人STスポット横浜
地域連携事業部 内）
TEL：045-325-0410
FAX：045-325-0414
WEB: http://y-artsite.org
MAIL:office@y-artsite.org

@Y_Artsite

ヨコハマアートサイト

ヨコハマアートサイトに関することを中心に、横浜市内のさまざまな地域文化活動について発信します。

季刊ヨコハマアートサイト Vol.018

発行　ヨコハマアートサイト事務局
編集　認定NPO法人 STスポット横浜
テキスト　小川智紀　池田友実　加納美海
デザイン　相澤事務所株式会社
撮影　福井裕子
印刷・製本　株式会社 三島印刷
発行日　2018年12月28日

季刊誌についてのご意見・ご感想もお待ちしています。

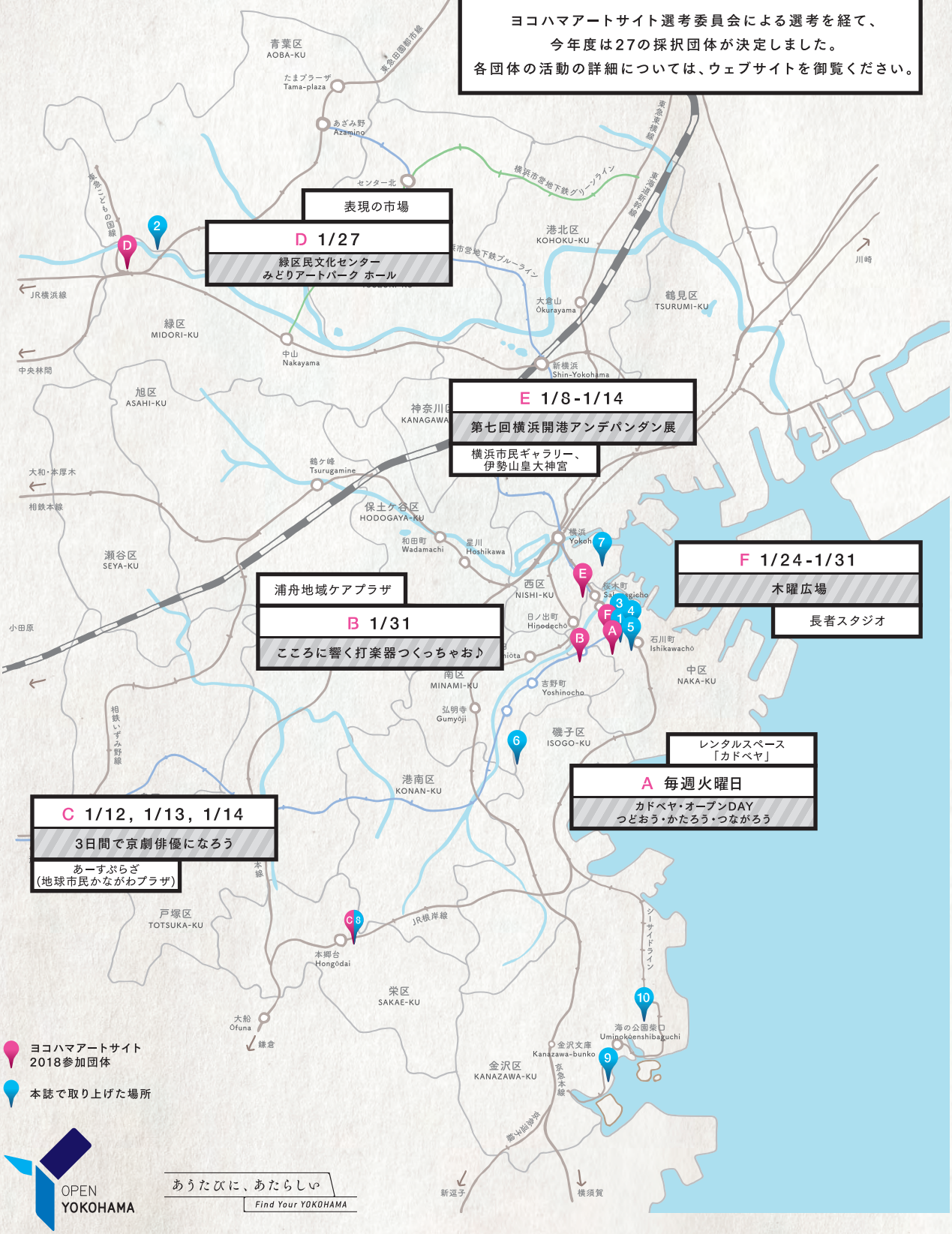
YOKOHAMA ARTSITE

ヨコハマアートサイト　おでかけMAP

横浜市の地域文化をサポートするヨコハマアートサイト2018参加団体による
1月のイベントをピックアップ。ぜひ、おでかけの予定に加えてほしいものばかりです。

横浜市の地域文化を支援するための「ヨコハマアートサイト」助成金

ヨコハマアートサイト選考委員会による選考を経て、
今年度は27の採択団体が決定しました。
各団体の活動の詳細については、ウェブサイトを御覧ください。



OPEN YOKOHAMA

あうたびに、あたらしい
Find Your YOKOHAMA

最新情報・詳細はこちら　http://y-artsite.org/

ヨコハマアートサイト